

イギリス・ロマン主義時代に至る
アイデンティティー形成の変遷と文学

細 川 美 苗

松 山 大 学
言語文化研究 第41巻第2号（抜刷）
2022年3月

Matsuyama University
Studies in Language and Literature
Vol. 41 No. 2 March 2022

イギリス・ロマン主義時代に至る アイデンティティー形成の変遷と文学

細 川 美 苗

イギリス・ロマン主義時代においては、孤独な自我、アイデンティティーの表現がしばしば見られる。メアリ・シェリー（Mary Shelley 1797-1851）の『フランケンシュタイン』（*Frankenstein, or the Modern Prometheus* 1818）においては、他者と互いに共感できる関係を築くことができず、孤独であることが登場人物たちを悲劇に導く一つの要因となっている。本論では、イギリスにおいて人が社会の中で他人や自身を位置づける際の自己意識、アイデンティティーがどのように変化したのかを考察し、それがどのように当時の文学における自我表象と関係するのかを跡付けたい。

パトリック・コールマン（Patrick Coleman 以降コールマン）は、17世紀から18世紀にかけて生ずる近代的な国家において出版文化が刺激する意見交換が醸成する市民社会および個人主義の台頭の流れの中で、人々の自意識が公的な自己と私的な自己に分裂する様を見出している。以下は分裂した自意識の在り方についてのコールマンの説明である。

With this development came new ways of distinguishing between the “private” and “public” spheres of life. If in earlier times the lives of kings, warriors, and priests carried exemplary significance by virtue of their roles in the old order, similar value could be claimed for persons whose lives exemplified the importance of unofficial action, as distinct from visible public function, in the

life of civil society. Eventually, any life could be seen as invested with general significance irrespective of its “inherent” social importance. For what was the “public” itself, if not the domain constituted by the self-representations of private individuals in print and other media? (Coleman 4-5)

このような発展にともない生活における「公」と「私」の区別が現れた。以前は王や戦士や聖職者の人生が、彼らが旧体制で果たした役割のために賞賛に値する重要性を帯びていたとするなら、市民社会において可視的である公的な営みとは区別された、非公式の行為の重要性を示す個人の人生にも類似した価値が付与された。やがては、人の生得の社会的価値とは関係なく、いかなる人生も普遍的な重要性があるとみなされるようになった。なぜなら、印刷物やそのほかの媒体によって表現される私人の自己表象によって構築される領域こそが「公」というもののなのだから。

コールマンの指摘においては、印刷物として公に共有される私的な領域が出現したことで、私的な行為やそれを導く感情が公的な価値を帯びるようになったことが示されている。従来は社会的役割に付与されていた人物の価値が、個人の内面のあり様や私的な行為にも見出されるようになったのである。それゆえ、従来は題材とはなりえなかった私的な領域に関する物語や絵画が描かれ、その登場人物たちの美德、またはコールマンの指摘からは除外されているが場合によっては不徳が、社会に共有された価値を帯びるようになったのである。

このような、名もない市民の人生に向けられた関心は、経済的な余裕を得たことで生き方を選択することが可能になった中産階級が、どのように生きるのか、そしてその結果としてどのようなアイデンティティを得るのかを強く意識するようになった結果である。特に小説に示される登場人物の私的領域である内面、つまり感情について、社会的意義という観点からスーザン・マニング (Suzan Manning 以降マニング) はこのように説明している。

“[I]t reflected anxiety about virtue in a newly privatized social context, no longer available to view in action, but in the domestic sphere, where women and men were defined in terms of the quality of their internal responses, their emotional natures.” (Manning 92-3)

それは新たに私的な領域を包括するようになった社会的背景における、美德に関する不安を映し出しているのである。美德はもはや行為の中にあるのではなく、私的な空間に見出されるのであり、そこでは、内心の反応や感情の性質といったもので、男性も女性も何者であるか定義される。

このように、最も私的な領域である個人の内面や感情が、その人物の社会的位置づけと、その自認であるアイデンティティーに関わる要因となったのである。

このような新しいアイデンティティーの在り方は、従来の出自に基づく固定化されたアイデンティティーとは性質の異なるものであった。アンドレア・ヘンダーソン (Andrea Henderson 以降ヘンダーソン) は出自に基づくアイデンティティーと市場経済に準じて形成されるアイデンティティーの緊張関係が、17世紀には生じていたことを指摘している。

As early as the seventeenth century, one finds evidence of tension between two modes of personal valuation — one based on social rank and blood lines, reflecting an older and more static order, and the other based on individual merit and associated with capitalist-class imperatives and the growing strength of the market economy. (Henderson 39)

17世紀には個人に関わる評価の二つの在り方が緊張関係にあったことが分かる。一つは社会階級と出自に基づく評価で、旧体制のより変化の乏しい秩序を反映したものである。もう一つは個人の功罪に基づくもので、資

本主義的な階級規則と高まりつつある市場経済の影響力に関連している。

ヘンダーソンは主に資本主義経済の台頭という観点からイギリスにおけるアイデンティティーの変遷を論じているのだが、上記のコールマンと異口同音に、出自に基づくいわば公的な階級や役職に関わる自意識とは別の、私的な自己に関わるアイデンティティー意識の発達が17世紀以降顕著に見られると述べているのである。

ヘンダーソン、コールマン両者が主張する二つのアイデンティティー意識の緊張関係は、18世紀後期において、出自とは無関係に形成される近代的なアイデンティティーが一般的となることで解消される（Henderson 39）。ヘンダーソンはフランス革命で旧体制が崩壊し資本主義を基盤とした価値観が優勢となったことで、この二つのアイデンティティーの緊張関係が解消されていったと説明している。

It is my contention that at the moment the traditional genealogy-based model of identity was called into question by the ideals of the French Revolution and the realities of capitalist and industrial development, a market-based model of identity that has long been emerging rapidly gained ground. (Henderson 38)

私が主張するのは、系譜に関わる伝統的なアイデンティティーの在り方が、フランス革命を引き起こした理念や資本主義及び産業の発展の現実とといったものによって疑問に付された時期に、長い時間をかけて芽を出していた市場に基づくアイデンティティーの在り方が急速に広まったということである。

イギリスロマン主義時代における人々のアイデンティティー意識は、旧体制における社会秩序に依拠するものから、資本主義に基礎を置く現代的なものへ推

移する過渡期にあったといえる。このような自己意識の移り変わりは、産業革命の加速に伴う社会構造や人々の関係の変化からも影響を受けている。17世紀後半から始まった農業革命における囲い込みが、余剰となった労働者を都市部へ送り込むと共に、農業の生産性が向上し人口増加を促したことで都市空間が生まれた（川北 247-48）。人口が流動化したことで、閉鎖的、固定的な社会において個人のアイデンティティーを決定していた系譜や社会的地位といった要素が人間関係を構築する基礎として機能しなくなり、資本主義社会における経済的な要因に基づくアイデンティティーの形成が促進された。

ロマン主義時代にすでに後退し始めていたアイデンティティー意識は、社会的地位や家柄や系譜という権威に裏打ちされていたが、新しく芽生えた資本主義経済に基づいた社会構造におけるアイデンティティーは、そのような担保を欠いていた。この新しいアイデンティティーの在り方について、ヘンダーソンは以下のように説明している。

... people increasingly did more than present themselves as “marketable” objects and anticipate commercial deceit in others ; as the traditional system of identification and valuation of individuals lost its prestige, people came to understand personal identity, in both its public and private aspects, in terms of the dominant evaluative scheme based on market forces. (Henderson, 40)

人はますます自身を「需要のある」対象として表現する以上のことをするようになり、それゆえ他人の商業的欺瞞を懸念するようになった。伝統的な帰属意識と個人を評価する体系が威信を失ってゆくに伴い、優位を得た市場要因に基礎を置く価値判断体系に鑑みて、人々は公的または私的なアイデンティティーを理解するようになった。

つまり、伝統や系譜といった根拠を失った人々のアイデンティティーは、富と

いう流動的な基盤の上に成立するようになったのである。他人の価値は、資本主義経済に基づく社会において自分にとって有益かどうかにかかっており、価値ある人物とみなされるためには、自分が相手に有益な者であるように見えなければならなかった。このような状況から他人の欺瞞への懸念が生じるのであった。これは資本主義社会においては、富の蓄積による社会的優位性を含意する「上流階級の地位を示す印となるものは市場に並んでおり、金銭と同様、手に入れることができた」(“Signs of upper-class status have been imported into the market place and have acquired, like money.” (Henderson 44)) からだ。このような背景から、人物の価値を推し量る尺度として、経済的側面という流動的な要因と比較して、人物の内面がより本質的な価値を有するとみなされる傾向が生じた。

実際に市場経済の隆盛により台頭した裕福な中産階級市民が自身のアイデンティティー構築に関心を高めたため、文学作品においては、ヘンリ・フィールディング (Henry Fielding 1707-54) の『トム・ジョウンズ』(*The History of Tom Jones, A Foundling* 1749) やサミュエル・リチャードソン (Samuel Richardson 1689-1761) の『パミラ、あるいは淑徳の報い』(*Pamela; or, Virtue Rewarded* 1740) などのような、名もない市民がどのように生き、どのようなアイデンティティーを形成するのかを描いた新しい小説のジャンルが形成された。これらの小説の特徴について、ジョン・ミュラン (John Mullan 以降ミュラン) は次のように説明している。「その二つの手本、つまり感情的な男性と感受性の強い女性は新しいジャンルに属するものだ。そのジャンルの真新しさとは、私人としての自我、私的な個人の物語を、意義深いものとしたところにある」(“The two paragons, the man of feeling and the woman of sensibility, belonged to a new genre which was new because it took as significant the story of the private individual — the self as a private person.” (Mullan 124))。ミュランの説明によれば、私人の生涯を主題とした小説の特徴は登場人物の内面を詳細に描くことであり、そこで示される強い感受性はその人物の優れた資質を示していると認

識されるようになったのである。

上述した感受性の隆盛と資本主義社会の拡大の関連について、マニングは以下のように指摘している。

Sensibility coincided with an explosion in the habit of reading, the proliferation of circulating libraries, reading societies, periodicals and journals. To contemporary commentators there were incredible parallels between the burgeoning national wealth of commercial society, the cultural capital of an emergent bourgeois class with leisure and affluence, and what we might call the ‘emotional capital’ of sensibility. (Manning 92)

感受性〔の流行〕は読書習慣の急激な増加、巡回図書館、読書会、定期刊行物、雑誌の激増と同時に起こった。当時の評論家にとっては、商業に携わる社会階層の保有する資産の急増、余暇と豊かさを手に入れた新興ブルジョワ階級の文化的資本と、感受性の「感情面の資本」と呼べるものの間には信じられないほどの並行関係があった。

資本主義社会への移行と並行して、公的な役割とは離れた私的な個人のアイデンティティー形成に関心が高まったことは上述した通りである。そのような状況の中で、個人の資質はその内面、感受性の洗練を基準に推し量られるようになり、感情を描く文学の隆盛を導いたといえる。このような変化を促す経済的な要因、社会構造の変容を確認したが、次に哲学的な環境を確認したい。

資本主義社会の台頭に伴う個人主義の発展にともない、その社会において人物の価値を推し量る目安として感受性が取り入れられた背景には、「感情主義」あるいは「道徳感覚派」(柘植 32)と呼ばれた当時の道徳哲学の影響が色濃く見られる。感情主義において、感情や情動といった個人の内面の動きが道徳の基礎をなしているとみなされたことで、私人の内面をつぶさに描く感傷小説が

広く読まれるようになったのである。柘植尚則（以降柘植）によれば、17世紀後期以降、感情を道徳的判断の基盤とした代表的な哲学者はアンソニー・シャフツベリ（Anthony Ashley Cooper, The Earl of Shaftesbury, 1671-1713 以降シャフツベリ）、フランシス・ハチスン（Francis Hutcheson, 1694-1746 以降ハチスン）、デヴィッド・ヒューム（David Hume, 1711-1776 以降ヒューム）およびアダム・スミス（Adam Smith, 1723-1790 以降スミス）であり、道徳的な判断が理性や知性によってなされるという考えに対して、彼らはそれが感覚や感情に由来すると主張した（柘植 32）。柘植はシャフツベリを感情主義の先駆者とし（柘植 32）、彼の唱えた道徳判断について以下のように説明している。

人間は、自分や他人の情愛や行為について反省し、正と不正の感覚を持つことで、有徳になる。…シャフツベリは正と不正の感覚を「道徳感覚」（moral sense）とも言い換えている。…シャフツベリの「正と不正の感覚」は直観的な能力であり、内的な感覚である。（柘植 34-36）

シャフツベリの論の重要な点は、道徳感覚は理性による判断とは異なり、感情のように自然と湧き上がるもので、「生得的な原理」（柘植 35）であるとみなされている点である。

続いてハチスンの感情主義について、柘植は以下のように5つの特徴を列挙している。

ハチスンは第一に、徳や悪徳（道徳的な善や悪）に関する道徳判断を、是認や否認（快楽や不快）という「感情」と見なしている。第二に、その道徳判断を、他人の行為、性格、情動に対する「観察者」（observer, spectator）の感情と捉えている。第三に、そうした是認や否認の感情から、愛や憎しみといった新たな情動が生じると考えている。第四に、道徳判断を、利害

に関する判断から独立した、かつ、それに先行するものとして捉えている。そして、第五に、道德感覚を「美の感覚」(sense of beauty)に類するものとして、言い換えれば、道德判断を美的判断に準えて考えている。(柘植 38-9)

そのうえで、第四と第五の特徴はハチスンに特有の議論であり、その他の点は感情主義に共通する特性であると、柘植は述べている。

ヒュームは、ハチスンの「道德感覚」という考えを受け継ぎつつも、徳と悪徳の区別を「共感」(sympathy)から説明している(柘植 41)。柘植によれば、ヒュームは善悪に関する判断をするのは特別な感覚ではなく、他人の気持ちや立場を想像することで、まるで自分の感情であるかのように関心を抱くことを可能にする力、つまり共感に道德の基礎をおいている(柘植 45-6)。

スミスはヒュームと同じく「道德感情」(moral sentiments)を共感から説明しているものの、他人の立場を想像したとしてもその感情を直に自分の感情のように感じることは不可能であると考えている。スミスによれば共感、つまり「同胞感情」(fellow-feeling)(を持つこと)によって人は「他人の立場に身を置いて、他人がどう感じているかを考えることで、他人と同じような感情を抱くのである。…つまり、想像上の立場の交換に基づくものであり、単に感情(情念)が人から人にうつることではない」のである(柘植 49)。さらにスミスの道德感情論においては、このような共感から一歩進んで、その感情を引き起こした起点において発生している感情と、それに共感した自己の感情を比較したうえで、起点における感情に対する判断が行われる。この点について、柘植は以下のように総括している。

観察者は、想像によって当事者の立場に身を置き、同胞感情を持つ。そこからさらに、この同胞感情を当事者の感情と比較する。そして、両者が一致する時には、当事者の感情を適正なものとして是認し、両者が一致し

ない時には、それを不正なものとして否認する。この是認や否認の感情が「道德感情」にほかならない。このように、道德感情は共感から生じる。言い換えれば、共感は道德感情の起源なのである。

先にみたように、ヒュームの「共感」は、「創造」や「立場の変更」を含むことがあるとはいえ、基本的には「感情の伝達」や「観念を印象に変える働き」である。それに対して、スミスの「共感」は、「想像上の立場の交換」に基づき、さらに、感情の「比較」を行うものである。それゆえ、ヒュームの共感よりも反省的な作用である。(柘植 49-50)

スミスの共感論においては、「有用な性格が徳として是認されるのは、それが有用だからではなく、適正だからである。それゆえ、道德的な是認の感情は、効用を知覚することから生じるのではない」点が、ヒュームの共感論とは異なる部分である(柘植 51)。つまり、スミスにおいては対象が有用であるかどうかよりも、ある感情がそれを引き起こした要因に対して適正なものであれば好ましいものと認識されるのである。

感情主義においては、人を行動に駆り立てるのは理性ではなく情動だと考えているが(柘植 159-71)、それでは、利己的な感情はどのように制御されることで、感情主義は徳を達成できるのであろうか。ヒュームにおいては利己的な情念は社会の希求、利己的な行動の結果陥る孤独を理解することで制御される(柘植 163)。一方スミスは、人は「自分の情念を規制することができなければ、有徳になることはできない」のだから「自己犠牲の徳を、他のあらゆる徳を可能にするものとして重視している」(柘植 168) ゆえに、自己是認を求める結果徳を愛し、利己的な感情を抑制して徳を愛するようになる(柘植 169)。このように、感情主義では情動と利己主義をうまく社会性のある人格形成へと転換させ徳を生じさせたといえる。

このような道德哲学を背景に、感受性は人間に自然に備わっているものであり、かつ社会的に有用とみなされる新しい位置づけを得た(“Sensibility”

was natural and yet newly discovered” Mullan 121)。新しい感受性の位置づけは、当時の文化一般へと拡大し、他人への共感という能力によって有機的な社会を構築する原動力となる一方、それを持たない者の人間性を疑い排除した。このような当時の道德哲学と新しい感情の在り方について、ミュランは以下のように説明している。

Surely it is no accident that, contemporary with the sentimentalism of such fiction, we find everywhere in philosophy and aesthetics the vocabulary of sentiment and sympathy, and that Adam Smith and David Hume try to found a moral philosophy on the ‘natural’ capacity for fellow-feeling.

... Sympathy rescues us from solipsism and self-interest. Sympathy means not so much that one individual’s experiences *can* become another’s, as that they *must* be so translated. Sympathy explains how our expressions of approval and disapproval need not be the reflexes of mere habit or prejudice, but can be understood as the offspring of ‘human nature’ — and therefore not *mine* or *yours*, but *ours*. (Mullan 125-26)

そのような小説の感傷性と同時代に属する哲学や美学などあらゆる分野で、我々が感情や共感といった語彙を目にするのは全く偶然ではない。アダム・スミスやデヴィッド・ヒュームは思いやりという「自然」に備わる能力の上に道德哲学を築こうとした。

…共感是自己中心的な考えや私欲から人を救ってくれる。共感が意味することは、個人的な経験を他人も経験「しうる」というのではなく、むしろある経験は万人の経験へと変換され「なければならない」という事だ。我々の賞賛や非難の表現が、ちょっとした偏見や習慣的な反応ではなく、どれほど「人間性」に深く根を持つものなのかという事を、共感は示している。——それゆえ、「私のもの」でもなく「あなたの」ものでもなく「我々

の」ものなのだ。

死や苦痛に対して嫌悪を感じ、他人のそのような境遇に自らのことのように苦痛を覚えるといった、人間に本来備わっているとみなされる「自然な」共感力を持つ程度によって、その人物の社会的地位が判断される社会が成立した。

共感を基礎に置く社会の発展を背景に、強い共感力と感受性を備えた道徳的に優れた存在へと自己研鑽するための手引きとして、感傷小説が流行した。マニングは以下のように述べ、小説に描かれる悲惨な状況に対して、どれほど涙を流すのかによって読者の審美眼、優れた感受性が試され、それに準じて人としての価値が推し量られたと示している。「あなたがより多くの涙を流すことができるほど、あなたが示した感受性はより洗練されたものとなり、あなたはより良い人物なのである。読者の審美眼の価値はその反応の強度に準じて見積もられたのである」(“The more tears you can shed, the finer a sensibility you exhibit, the better person you are. The value of the reader’s taste was computed according to the intensity of her response.” (Manning 93))。このように感受性が人としての価値と相関であると考えられたため、感受性と美徳の意味合いが重複するものと考えられたことをミュランは以下のように説明している。

The odd thing about all this was that finding your feelings through novels was supposed to be a *moral* activity. . . . The process of learning to have feeling was allowed to be morally ennobling because ‘sensibility’ was not something that everyone possessed. It was a special kind of susceptibility. So special, in fact, that, while a privilege, it could also be a kind of affliction. Those with ‘sensibility’ had finer nerves than others, and were more easily discomposed or disturbed by their own feelings. . . . They [sentimental novels’ heroines] are always trembling, fainting, turning sick with feeling. The best people are so attuned to their own feelings that they can be weakened by them.

As they are also laudably responsive to other's feelings, especially of distress, they can be sure that this susceptibility is virtuous. (Mullan 120-22)

このことすべての奇妙な点は小説を通じて感情を見出すことが「道徳的な」営みだとみなされたことだ。…「感受性」といったものは、誰にでも与えられているものではないので、感情を習得する過程は道徳的な向上につながると考えられていた。小説を読むことで培われるのは特別な「感じやすさ」であった。実際のところ、それは特別なもので、名誉であるとともに苦悩でもあった。「感受性」を持つものは、そうでない者より繊細な神経を持ち合わせており、自分自身の感情が原因で容易く落ち着きを失ったり動揺したりした。…彼ら〔感傷小説の主人公たち〕は、いつも感情によって打ち震え、失神し、気分が悪くなる。最善の人々は感情のせいで身体的に衰弱するほど、自身の感情と調和しているのだ。また、彼らは驚くほど他人の感情、特に他人の苦境、にも敏感に反応することから、この感じやすさが美德であると彼らは確信できるのだ。

互いに共感する力は、その程度に個人差があるにせよ、人間に本来備わる能力であると考えられていたが、共感された感情をより鋭敏なものとし、社会的に好ましい方法で表現する作法を学習するために人は感傷小説を読み洗練を身につけようとした。感傷小説を読むことで優れた感受性の表現を身につけて、洗練を示す態度や服装、話し方や話題といったことを実践することで、社会的に優位とみなされるアイデンティティーを得ることができるのである。

18世紀後半には、生まれついた社会階級が個人を位置づける機能を失いつつあり、替わって感受性の強さが人物の価値を測る尺度として登場してきたことは、これまでに見てきたとおりである。実際に洗練を尺度として他者に対して優越感を感じる社会が出現していたことを、G. J. バーカー＝ベンフィールド (G. J. Barker = Benfield) は以下のように指摘している。

By definition, those qualified by their special degree of sensibility constituted themselves a special group, self-conscious in its capacity for feeling and virtue . . . in opposition to the unfeeling and vice-ridden world from which they were distinguished. (Barker-Benfield, 258)

当然、感受性の豊かさによって特別だと認められた者たちは、その卓越した感受性と美德を自覚した特別な集団を形作った。それは彼らから切り離された、感受性の鈍い悪徳にまみれた世間と対置されるものであった。

ここでも、感受性を身に着けることによって、自分の社会的優越性を自認することが可能であったことが確認できる。18世紀後半には、生まれた身分に関係なく、洗練を習得することで社会的に優位なアイデンティティーを得ることが可能になったといえる。封建的な社会から資本主義社会への移行に際して、経済的優位性と両輪をなす内面的に優れたアイデンティティーを得ることで、社会的上昇を果たすことができたことがうかがえる。その一方で、上記ヘンダーソンの引用が示すように、感受性に基礎を置くアイデンティティーは流動的で不確かなものであった。

1771年に出版されたヘンリ・マッケンジー (Henry Mackenzie 1745-1831) による『感情の人』(*The Man of Feeling* 1771) には、過剰に洗練された感性の持ち主である主人公ハーリーが、アイデンティティーを偽る詐欺師たちに次々と騙される姿が描かれている。以下『感情の人』第19章はハーリーがある貴族の館を訪問した場面で、上流階級を思わせる服装や会話によってアイデンティティーを偽る人物に主人公が容易く騙される。

He had almost reached it, when he observed a young gentleman coming out, dressed in a white frock, and a red faced waistcoat, with a small switch in his hand, which he seemed to manage with a particular good grace. As he

passed him on the steps, the stranger very politely made him a bow, which he returned, though he could not remember ever having seen him before.

The conversation, as they walked, was brilliant on the side of his companion. The playhouse, the opera, with every occurrence in high-life, he seemed perfectly master of; and talked of some reigning beauties of quality, in a manner the most feeling in the world.

When the grazer and he were gone, Harley turned to the remaining personage, and asked him, if he knew that young gentleman? ‘A gentleman?’ said he; ‘ay, he is one of your gentleman at the top of an affidavit. I knew him, some years ago, in the quality of a footman; and, I believe, he had sometimes the honour to be a pimp. At last, some of the great folks, to whom he had been serviceable in both capacities, had him made a gauger in which station he remains, and has the assurance to pretend an acquaintance with men of quality. The imprudent dog! with a few shillings in his pocket, he will talk you three times as much as my friend Mundy there, who is worth nine thousand, if he’s worth a farthing. But I know the rascal, and despise him, as he deserves.’ (*The Man of Feeling* 19-22)

玄関に近づいたまさにそのとき、彼は一人の若い紳士が屋敷から出てくるのに出くわした。その人物は、レース付きの赤いベストに白いフロックコートをはおって、短い乗馬用の鞭を手にしており、その扱い方に特に気品を感じられた。知らない人のはずが玄関への階段ですれ違ったとき丁寧にお辞儀をしたので、ハーリーもそれに応じたものの、どこで会ったのかについては全く「見当」もつかなかった。…

一緒に歩いているあいだに交わされたやり取りでも、この人物の話は素晴らしかった。芝居やオペラのみならず上流の社交界の噂話などについてもすっかり精通しているようで、上流階級随一の美女たちについても、こ

の世でもっとも感じ入っている様子で語るのであった。…

牧羊業者とその若者が行ってしまうと、ハーリーは居残っている人物のほうを向き、あの若い紳士のことをご存じかと尋ねた。「あの紳士だって！」と相手は言った。「ええ、やつは宣誓供述書の冒頭に名前を連ねている紳士の一人でしょうとも。数年前、はじめて知り合ったときにはやつは使い走りで、ときにはポン引き、という名誉を授かっていました。そうして、やつは両方の手腕で名士たちに仕えてきたんですが、とうとう名士のなかのある人たちが彼を収税官に引き立ててやったんです。いまでもその仕事をしてますよ。だから、図々しくも身分ある人たちとつきあいがあるなんて振りをしているんです。恥知らずの畜生め！ ポケットには数シリングしか入っていないのに、あそこのわたしの友人マンディの三倍もあなたと話をすると。やつに一文でも価値があるとしたらマンディのほうには九千ポンドの価値がある。やつはごろつきですよ。わたしは軽蔑していますが、やつにはそれがふさわしいというものです。」(『感情の人』 37-43)

引用冒頭にはハーリーが高貴な人物であると勘違いをした若者の服装に関する描写がある。それに続いて彼の態度が洗練されていることが述べられ、二人の会話は上流階級における社交の話題へと移っている。ここでは、身なり態度そして会話の内容によって、自らのアイデンティティーを偽る姿が示されている。18世紀終盤から19世紀初頭にかけては、このような偽りに対する不信がすでに広まっており、ハーリーのように他人にまんまと騙される滑稽で世間知らずな人物も、文学上のステレオタイプとして確立していた。

19世紀初頭においては、小説に描かれる感受性の欺瞞が暴かれるのみならず、感傷小説というジャンルの道徳的意義の脆弱性も意識されるようになっていた。この点についてマニングは以下のように述べている。

The pervasive success of the literature of Sensibility can only be understood

through its slippery relation to the declared pedagogical function of literature in the eighteenth century. . . . It was evident to commentators, practitioners and consumers alike, that while the theory of the literature of Sensibility was about instruction, the practice — what kept people actually *reading* it — had more to do with pleasure. (Manning 86-7)

感受性を描く文学の広範囲にわたる成功は、18世紀の文学が表向きに掲げる教育的な役割との関係を通じてのみ理解することが可能である。…論評家、作家や消費者にとって等しく明白であったことは、感受性を描く文学理論が教育に関わるものである一方で、実際は－現実には人々を「読書」にひきつけているのは－娯楽に関わる点であるという事であった。

1825年ごろには、感傷小説は他人の不幸を密かに目にするという私的で罪深い共感の感情を体験するのみで、教育的な効果はないのではないかとみなされていた (Manning 91-2)。

このような、万人に共有されるべき善と仮定された感受性をテーマとした文学が内包する欺瞞が露呈してゆく中で、ロマン派時代における文学に表現されたアイデンティティーはさらに変化を遂げていった。ウィリアム・ワーズワスとサミュエル・テイラー・コールリジによる『抒情歌謡集』(*Lyrical Ballads with a Few Other Poems* 1800) は、ロマン主義時代の幕開けを示す指標とされているが (Birch “Lyrical Ballads”), その「序」(“Preface” (1802版)) において示されたワーズワスの詩人観を引用し、マニングは以下のように論じている。

Developing the idea of ‘taste’ as the product of acute sensitivity, at once ‘natural’ and highly cultivated, Wordsworth’s ‘Poet’ is ‘a man . . . endowed with *more* lively sensibility, *more* enthusiasm and tenderness, who has a *greater*

knowledge of human nature, and a *more* comprehensive soul, that are supposed to be common among mankind': he is the 'Man of Feeling' redeemed from prison of inarticulacy to 'a *greater* readiness and power in expressing what he thinks and feels', and his universality is confirmed by his uniqueness ('Preface' (1802), pp. 255-8, italics added). (Manning 94)

「自然」なものでありつつ高度に練磨された鋭敏な感受性の産物としての「審美眼」という概念を進化させるワーズワースのいう「詩人」とは、「一層強烈な感受性とさらなる情熱と敏感さを授かった、人間性に関するより深遠な知性とより包容力のある魂を持つ者でありながらも、ありふれた人物なのである。」つまり、彼は言葉に詰まるという監獄から解放された「感情の人」なのであり、自分の考えや感情を表現するためにより卓越した饒舌と力量を持ち合わせているのである。そして彼の普遍性は彼の独自性ゆえに承認されるのである。

ここに示されているのは、感受性が万人に共有されるべきものから、詩人のもつ特別な力であるとみなされ始めたという変化である。マニングの説明は詩人に関するものであるが、ロマン派詩人とその周辺作家全般に関してこの傾向は当てはまるのではないか。感傷小説において描写される情景は、それを目にした語り手が言葉に詰まることや涙を流すといった非言語表現に移行することで、読者の方で自身の経験や想像力を使って未完の表現を補い共感できる価値へと転じていた。しかし、マニングが指摘するように、ロマン派時代において文学作品に示される感受性は、個人的な体験の描写でありながら普遍的な感情を導くのである。

ロマン主義時代の作品において、感受性は万人に自然に備わった力から特殊な力へと変容した。このような変化は、そのような感受性を持つ者のみが体験する孤独という主要なテーマへ発展した。ロマン主義時代に書かれた代表的な

小説であるメアリ・シェリーの『フランケンシュタイン』は、感情を共有することのできる友の希求が、小説の主要なテーマのひとつとなっている。主人公であるフランケンシュタインの物語を語るロバート・ウォルトン (Robert Walton) は、親密な共感を覚える人物を渴望しているとはっきり述べている「私は私に共感することのできる仲間を希求する」(“I desire the company of a man who could sympathize with me” (Shelley 13))。しかし、ウォルトンは出会って間もなく理想の友フランケンシュタインが息を引き取るのを見守るほかない。フランケンシュタインは生命の秘密という誰とも共有できない秘密を抱えて、友人や家族をすべて失い、その苦悩の原因となる彼の創造した生き物との絆も否定し、孤独の中で息を引き取る。フランケンシュタインが創造した生き物は、その創造主や出会った人間などに共感を求めるものの、彼の孤独をいやす友人関係を築くことはできない。友人の不在こそが、生き物の悲しみの原因であることは、以下の言葉に示されている。「あの神と人類の敵対者でさえみじめな境遇のなかにも友人や援軍を持っているのに、私は全くの孤独なのだ」(“Yet even that enemy of God and man had his friends and associations in his desolation ; I am quite alone” (Shelley 169))。ウォルトンやフランケンシュタイン、生き物の境遇は、読者が日常生活において体験することのない独自性の強いものであるが、マニングの説明によれば、その強烈な独自性がすぐれた表現を与えられることで、『フランケンシュタイン』という物語が読者の共感を得るのである。

イギリスにおいては、18世紀から19世紀、資本主義社会への移行に応じて、伝統的な系譜に基づくものから感受性を尺度とするアイデンティティー形成へ推移したといえる。そのような社会においては、洗練された感受性を身に着けるために、感傷小説が多く読まれ、共感と感受性は公に共有される価値として、個人のアイデンティティーを決定する主要な要素となった。しかし、18世紀終盤には、感傷小説が謳う美德が内包する欺瞞が露呈し、過度の感受性は滑稽なステレオタイプへと転じた。このような背景から、ロマン主義時代において文学に描かれる作家や登場人物の内面、つまりアイデンティティーは、万人に

自然と共有されることは難しい独自性の強い感受性の表現へ変化したのである。

*本論は2019年松山大学特別研究助成の成果である。

Works Cited

- 川北 稔編『イギリス史』新版世界各国史11 山川出版社 1998.
柘植 尚則『イギリス倫理思想史』ナカニシヤ出版 京都 2020.
Birch, Dianh, editor. *The Oxford Companion to English Literature*. 7th ed, Oxford UP, 2007.
Coleman, Patrick. "Introduction: life-writing and the legitimation of the modern self." *Presentation of the Self From the Renaissance to Romanticism*, edited by Patrick Coleman, Jayne Lewis, and Jill Kowalik, Cambridge UP, 2000, pp. 1-15.
Henderson, Andrea K. *Romantic Identities: Varieties of Subjectivity, 1774-1830*. Cambridge UP, 1996.
Mackenzie, Henry. *The Man of Feeling*. Edited by Brian Vickers, Oxford University Press, 1987. (『感情の人』久野 陽一他訳 音羽書房鶴見書店 2008.)
Manning, Susan. "Sensibility." *The Cambridge Companion to English Literature 1740-1830*, edited by Thomas Keymer and Jon Mee, Oxford University Press, 2004, pp. 80-99.
Mullan, John. "Feeling and Novels." *Rewriting the Self: Histories from the Renaissance to the Present*, edited by Roy Porter, Routledge, 1997, pp. 119-131.
Shelley, Mary. *Frankenstein; or, the Modern Prometheus. The Novels and Selected Works of Mary Shelley, vol. 1*, edited by Nora Crook, Pickering, 1996.